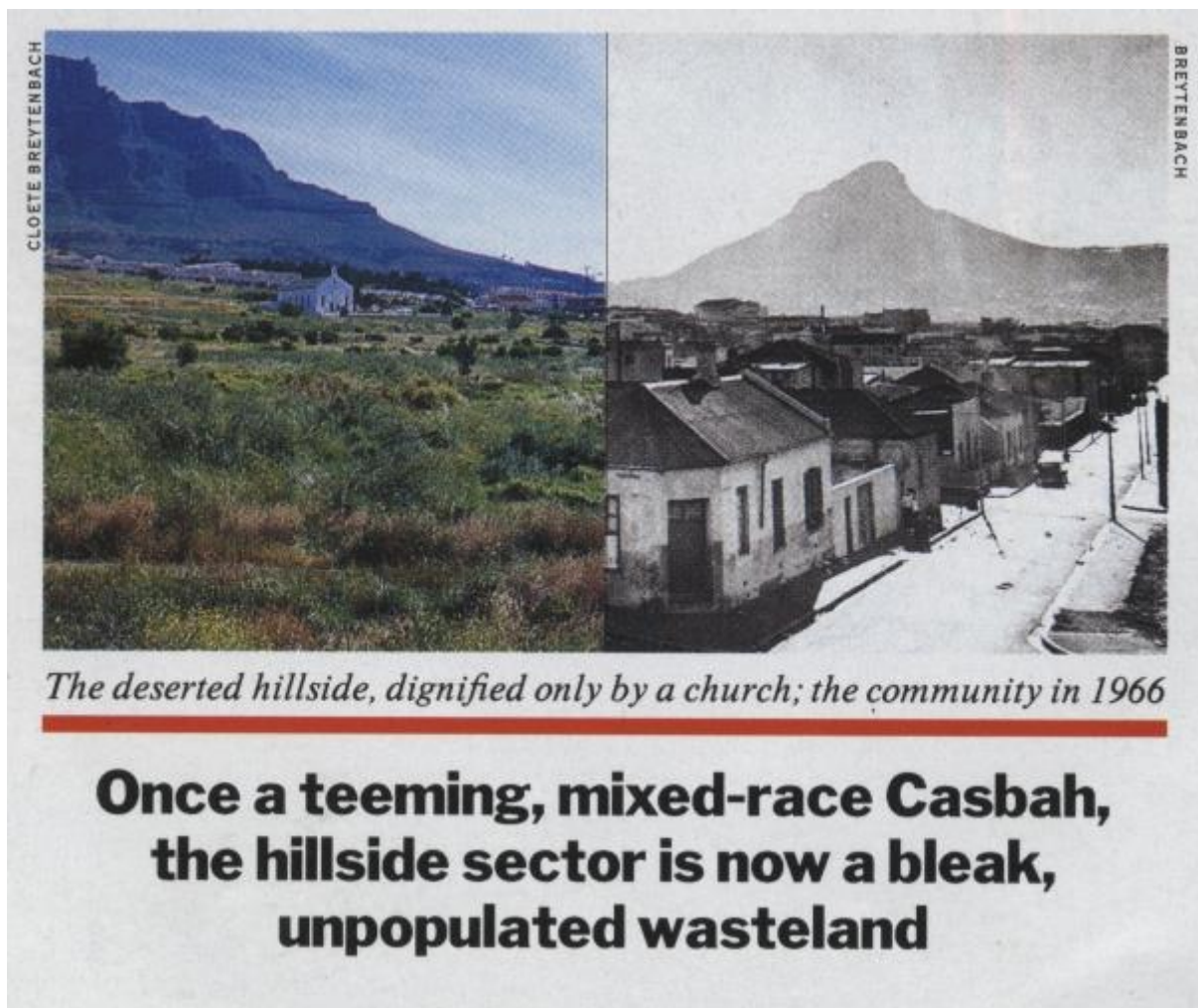


ほんやく雑記の４回目です。

前回は南アフリカの作家アレックス・ラ・グーマの「アパルトヘイト下の南アフリカの著作」("South African Writing under Apartheid")に出て来るソウェト (Soweto) をめぐって書きましたが、今回はケープタウンの第６区を取り上げ、ほんやくする人の気持ちと文脈から想像することの大切さについて書きたいと思います。

ラ・グーマは最初の物語『夜の彷徨』(A Walk in the Night)の舞台に自分自身が生まれ育ったケープタウンの第６区を取り上げました。第６区は１９６６年に強制的に立ち退きを迫られて、住んでいたおよそ５万人の人たちとともに消えてしまいました。(１９８８年１１月２８日の「タイム」誌の記事に、当時空き地のままに放置されていた第６区の様子が写真入りで紹介されています。)

同じ年、ラ・グーマは家族を連れて南アフリカを離れ、ロンドンに亡命しました。(写真 1 : 第６区の今と昔)



２回の世界大戦で西洋社会の総体的な力が低下したとき、１９５５年のバンドン会議を皮切りにそれまで虐げられ続けて来た人たちが立ち上がり、本来の権利を求めて闘い始めま

した。アフリカ大陸には変革の嵐（The wind of change）が吹き荒れ、南アフリカでもアパルトヘイト体制に全人種が力を合わせて敢然と挑みかかりました。ラ・グーマも200万人のカラード人民機構の指導者として、同時に作家として戦っていました。

『夜の彷徨』はそんな闘いの中で生まれた作品です。1956年以来、逮捕、拘禁が繰り返される中で執筆されたもので、厳しい官憲の目をかい潜って草稿が無事国外に持ち出され、1962年にナイジェリアで出版されました。作家のデニス・ブルータスは『アフリカ文学の世界』（南雲堂、1975年）の中で「私は最近アレックス・ラ・グーマ夫人に会ったことがある。夫人の話によるとアレックス・ラ・グーマは自宅拘禁中にも小説を書いていた。彼は原稿を書き終わると、いつもそれをリノリュームの下に隠したので、もし仕事中に特捜員か国家警察の手入れを受けても、タイプライターにかかっている原稿用紙一枚しか発見されず、その他の原稿はどうしても見つからなかったのである。」と紹介しています。作品は奇跡的に世の中に出たわけです。

原題は **A Walk in the Night** で、職を解雇されたばかりのカラード青年主人公マイケル・アドニスが第6区で過ごす夜の数時間を通して、アパルトヘイト下のカラード社会の実情が克明に描かれています。『全集現代世界文学の発見 9 第三世界からの証言』（学藝書林、1970年）の中に日本語訳が収められています。

今回はそのほんやくについてで、アドニスが同じぼろアパートに住む落ちぶれた白人を瓶で殴り殺してしまったあと部屋に戻った時に、ドア付近で物音がして、警官が来たのではないかと怯える次の場面です。

His flesh suddenly crawling as if he had been doused with cold water, Michael Adonis thought, Who the hell is that? Why the hell don't they go away. I'm not moving out of this place, It's got nothing to do with me. I didn't mean to kill that old bastard, did I? It can't be the law. They'd kick up hell and maybe break the door down. Why the hell don't go away? Why don't they leave me alone? I mos want to be alone. To hell with all of them and the old man, too. What for did he want to go on living for, anyway. To hell with him and the lot of them. Maybe I ought to go and tell them. Bedonerd. You know what the law will do to you. They don't have any shit from us brown people. They'll hang you, as true as God. Christ, we all got hanged long ago.

「きっとおれはやつらに話しに行ったらいいんだ。ベドナード。おまえは警官がおまえをどうするかわかっているな。やつらはおれたち茶色い人間のことなど、これっばしも聞いてくれやしない。やつらはおまえの首をつるしちまう、これは確かだ。ああ、おれたちは大昔から首つりにあっている。」が下線部の日本語訳です。問題はいろいろありそうですが、今回は **Bedonerd**→「ベドナード。」の日本語訳に限って、です。

日本語をつけた人はおそらく **Bedonerd** がわからなくてカタカナ表記にしたと思いますが、根はもう少し深いように思えます。

その人は **Bedonerd** がアフリカーンス語だと知らなかったのではないのでしょうか。ん？場所がケープタウンの第6区やと、主人公がカラードやと知ってたんやろか、と思っ

まいます。知っていれば、アフリカーンス語の辞書を引けば済むわけですし、たとえ知らなくても文脈から、くそっとか、そりゃだめだ、くらいのあまり品のいい言葉ではないと想像がつくはずです。(A Walk in the Night の註釈書では、Bedonerd に「バカな。(Afr.)=crazy; mixed up」の註をつけました。)

野間寛二郎さんはこの本が出された頃にガーナの元首相クワメ・エンクルマのものをたくさん翻訳されていますが、わからないことが多いからとガーナの大使館に日参して疑問を解消したそうです。わからないなら知っている人に聞く、それは普通のことです。brown people を茶色い人間とほんやくしていますが、混血の人たち (coloured) のことで、自分たちのことを茶色い人間とは呼ばないでしょう。ひょっとしたらアパルトヘイト政権が人種別に WHITE, ASIAN, COLOURED, BLACK と分類し、English と Afrikaans を公用語にしていたという史実も知らなかったのでしょうか。ほんやくを依頼された人も依頼した出版社も、お粗末です。

1987年にカナダに亡命中のセスル・エイブラハムズさんをお訪ねしたご縁で翌年ラ・グーマ記念大会に招待されてゲストスピーカーだったブランシ夫人とお会いしました。1992年にジンバブエに行く前にロンドンに亡命中の夫人を家族で訪ねました。そのご縁で、ある日ブランシ夫人の友人リンダ・フォーチュンさんから『子供時代の第6区の思い出』(1996年)が届きました。ラ・グーマやブランシさんや著者のリンダ・フォーチュンさんが生まれ育った第6区の思い出と写真がぎっしりと詰まっていました。

その人たちの残した尊い作品を見るにつけ、ほんやくをする人の気持ちの大切さが思われてなりません。(写真2:第6区ハノーバー通り)

次回は「ほんやく雑記(5)オハイオ州デイトン」です。(宮崎大学教員)

